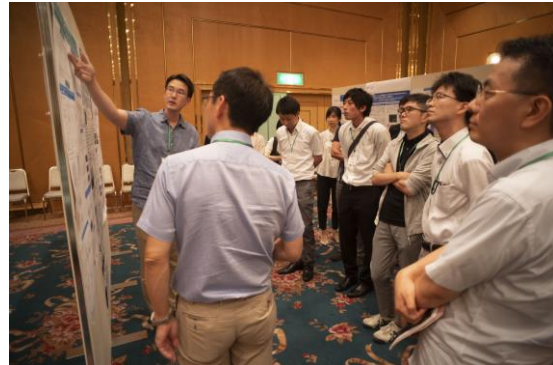


第 15 回日本病理学会カンファレンス 2018 開催報告

第 15 回日本病理学会カンファレンスを「腫瘍の源流をみてみたい」をテーマとして、2018 年 8 月 3 日～4 日の 2 日間、昨年に引き続き、愛知県犬山市の名鉄犬山ホテルにて開催いたしました。名古屋としては観測史上初の気温 40 度超えである 40.3 度という酷暑にもかかわらず、病理学会外からの招待演者 4 名、病理学会員の演者 6 名、共催セミナー演者 1 名を含む 86 名のご参加をいただきました。また、ポスター演題は 20 題をいただき、深夜まで活発な議論が行われました。北海道での病理学会総会の 6 週間後という開催日程だったので何名にご参加いただけるか不安でしたが、予想より多くの皆様にご参加いただい、また討論も若手を中心に活発に行われ、意義深いカンファレンスであったと思います。



1、開催の目的と概要

本カンファレンスは、日本病理学会会員、特に若手会員が、臨床から生命科学にいたる広範囲の専門家と、十分な討論と交流の場を提供するために毎年開催されているものです。今回で 15 回目となりました。開催テーマは診断病理に偏ることなく、広く病理学会会員が従事している学術研究に関する基礎から臨床までを縦断するようなもので、その中でも近年大きな進展がみられる研究領域を毎年研究推進委員会で選定しています。

今回のテーマとして、我々が日々接する腫瘍集団そのものの来し方を選びました。我々病理医は多彩な腫瘍組織像を日々みており、腫瘍がヘテロな集団であることを感覚として理解しています。そして、この感覚は近年科学的に証明されつつあり、その研究は大きな成果を生み出す領域へと発展しております。実際に様々な解析手段を用いて、腫瘍がなぜヘテロであるのか、腫瘍の多様性を生み出す要因は何なのかなどを探求している研究者を招き、病理医、病理研究者の間で密な討議をすることを目的としました。目の前を流れる大河の水も、もとをたどれば岩肌から湧く一滴の水です。なぜ、この岩肌のこの部分から水が湧くのか、水が湧けば周囲はどうなるか、そもそも水が湧かないような状況

はあるのか、そして目の前にある河の水がどのような経緯をたどって目の前に流れているのか、など、様々なことを「みてみたい」という好奇心に応えられるような、そして好奇心をさらに掻き立てられるようなカンファレンスになればと思い、「腫瘍の源流をみてみたい」というタイトルをつけました。

病理学会外からお招きした演者の方々は、みな若手から中堅で、バリバリと世界をリードする研究をされておられます。深夜まで情報交換を若手病理研究者とともに行っていただき、会の終了後のアンケートでも刺激を受けたという若者からの感想が多数ありました。本カンファレンスで得られる成果は、病理学のみならず、他の領域の医学研究にも貢献すると確信しています。一晚語り明かすことで得た新たな仲間とともに、日本から世界へ素晴らしい研究成果が多数発信されることを願います。

各講演後には若手研究者が数多く質問に立ち、ポスターセッションでも活発な議論が交わされました。ポスター発表は日本病理学会研究推進委員会の先生方に採点いただき、最優秀ポスター賞1名、優秀ポスター賞2名を決定し、カンファレンス閉会式において表彰しました。



今回のレクチャー講師と演題は以下の通りです。(敬称略、発表順)

森井英一 (大阪大学)	変遷する腫瘍の源
三浦恭子 (熊本大学)	長寿・がん化耐性げっ歯類ハダカデバネズミ
池田栄二 (山口大学)	腫瘍幹細胞が潜むニッチと低酸素ストレス
井垣達吏 (京都大学)	細胞競合によるがん制御の分子基盤
佐藤俊朗 (慶應大学)	オルガノイドが切り拓くヒト疾患生物学
鳥越俊彦 (札幌医科大学)	がん幹細胞と免疫システム
山田泰広 (東京大学)	iPS細胞技術によるがん細胞の理解と制御
谷内田真一 (大阪大学)	がんの不均一性とそれに伴うがんクローン進化
近藤英作 (新潟大学)	幹細胞マーカーTRA-PODXL1と悪性腫瘍との関り
田中伸哉 (北海道大学)	バイオマテリアルとがん幹細胞

なお、共催セミナーとしてイルミナ株式会社より以下のセミナーが開催されま

した。（敬称略）

石川俊平（東京医科歯科大学）

ゲノム病理学情報を用いたディープラーニング

一般ポスター発表は 20 題で、以下の 3 名にポスター賞が授与されました。（敬称略）

最優秀ポスター賞

野島聡（大阪大学）

組織透明化技術 CUBIC を用いた新たな病理組織診断法

優秀ポスター賞

坂本直也（広島大学）

BRAF^{V600E} 変異、CDX2 発現消失による大腸鋸歯状腺癌マウスモデルを用いた新規診断マーカー、治療標的の同定

優秀ポスター賞

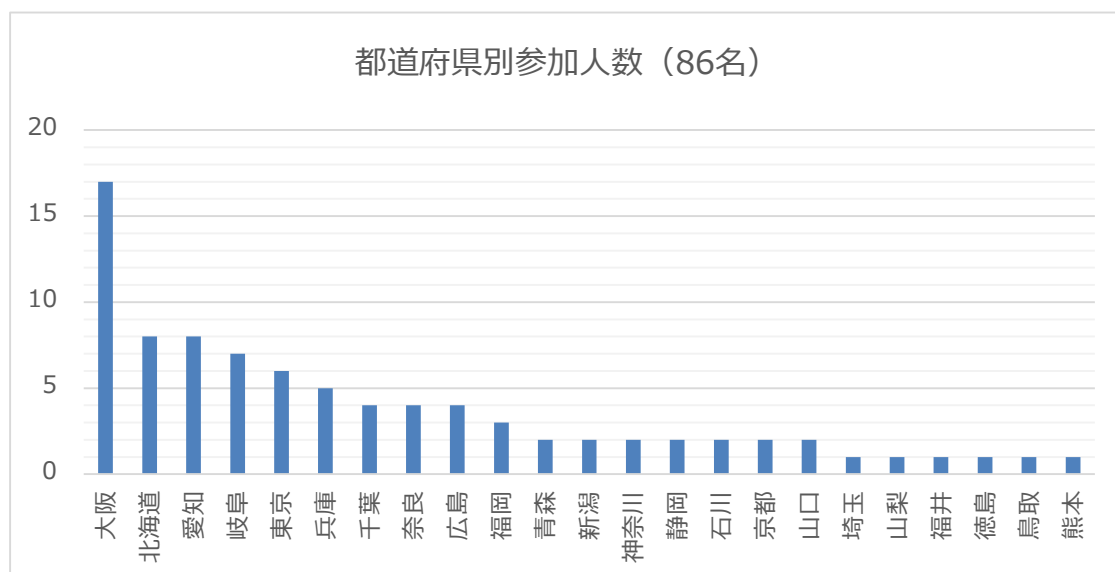
石田雄介（北海道大学）

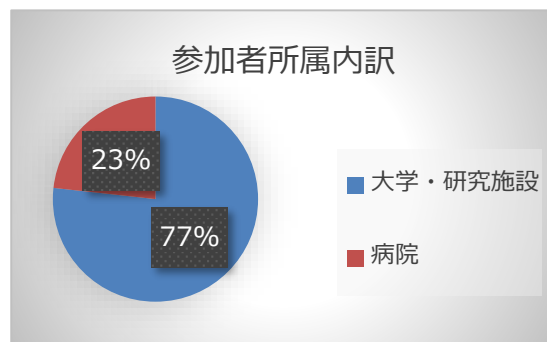
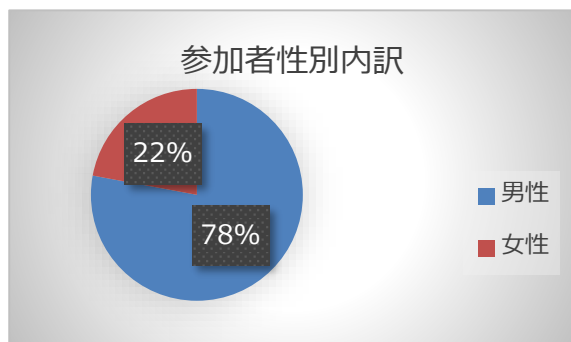
脳腫瘍 integrated diagnosis への deep-learning 法の応用

2、参加者の内訳について

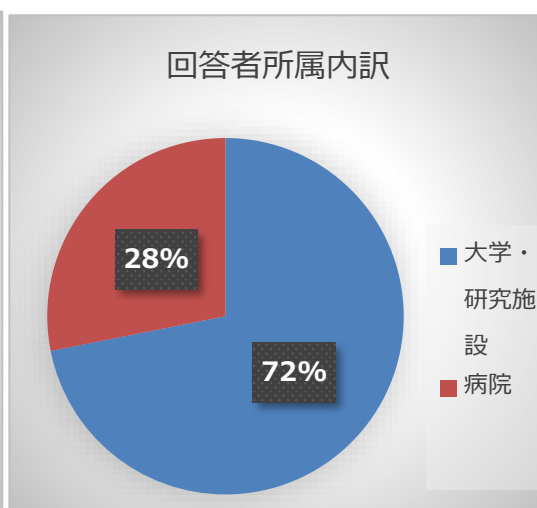
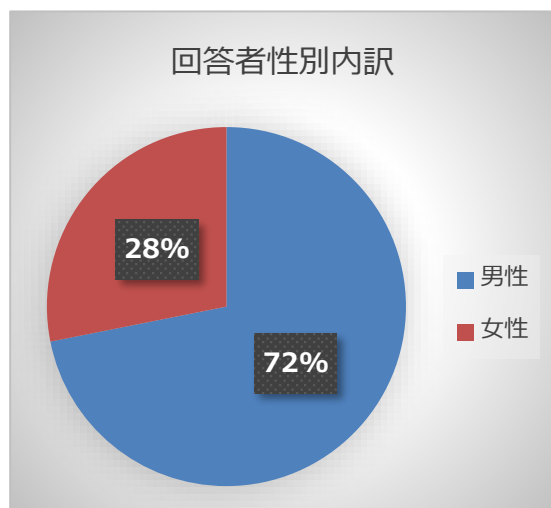
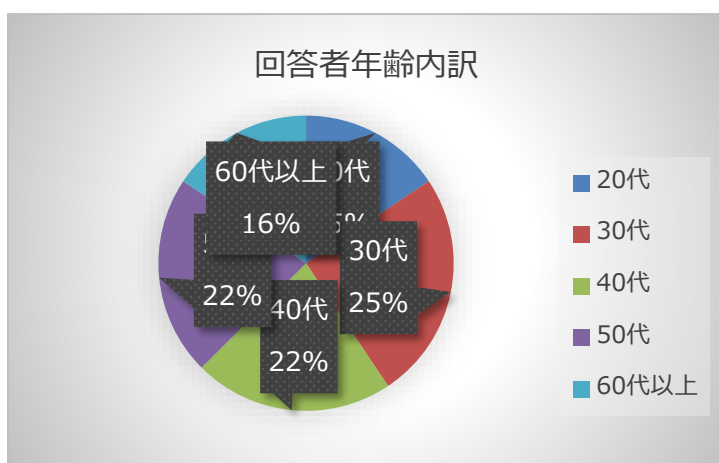
ポスター演題数 20 題

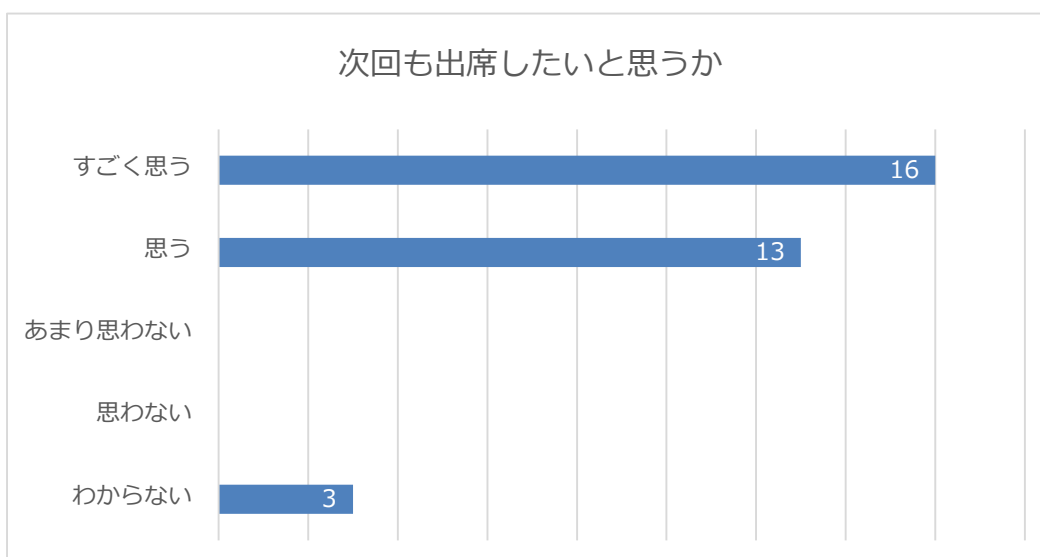
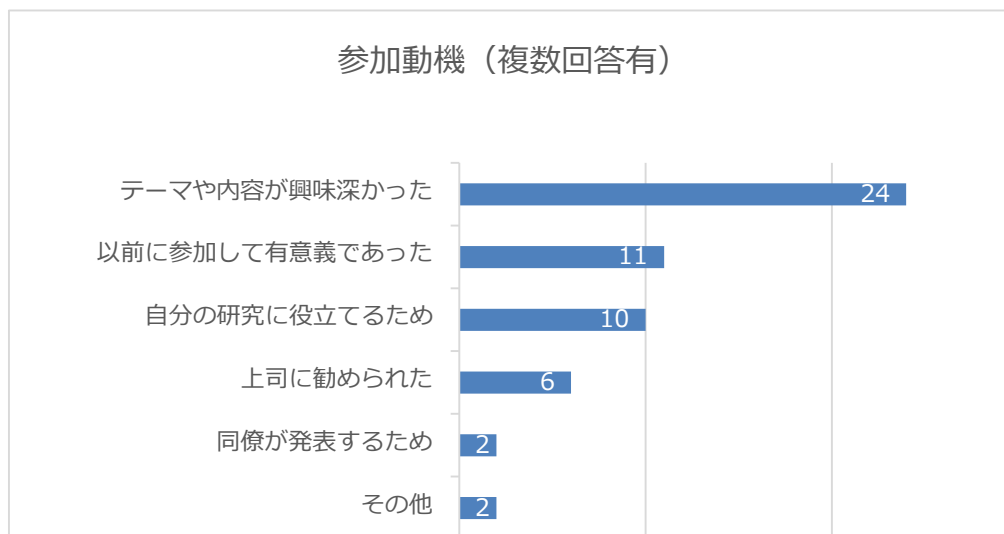
参加人数 86 名+運営スタッフ 3 名





3、アンケート集計結果（アンケート回収 32 名）





「わからない」の理由として、テーマによると記載されていた。

取り上げてほしいテーマ（自由記載）

- 腫瘍発生におけるエピジェネティクスの関与
- iPS 細胞と病理学
- コンパニオン診断とその理論的背景
- 腫瘍はもちろん、循環（血管）、その組織へのかかわり
- クリニカルシーケンスについてまとめて話を聞きたい
- 腫瘍の heterogeneity
- AI
- 腫瘍の源流パート 2

- 形態に遺伝子異常が反映できるのかどうか
- 次世代病理
- 最新の研究
- 脳科学
- 宇宙での生理学・病理学の話題
- 病理診断における HE 染色、免疫染色以外のツールに関して

感想、意見（自由記載）

- 参加者のレベルが高く、さらに勉強に励もうと思った。来年はポスターを出せるように頑張る。
- 夕食、ポスター、3 次会と議論の場が多くてよかった。
- ネームカード入れのひもが長いとよかった。
- コンパクトでスムーズでテキパキとした流れだった。
- 会場の冷房が強かった。
- 一人の演者について、ゆっくり時間をとって討論できるのがよかった。
- 大変刺激のかつ面白い時間だった。
- とても勉強になり楽しい会だった。自分もこういった場で発表できるような研究をしていきたいと思った。
- ポスターをグループごとに場所を分けてほしかった。
- 参加者が少ないように感じた。
- 大変興味深いカンファレンスだった。
- 大変よい雰囲気だった。
- レクチャー時間はもう 10 分ぐらい長く、50 分はあった方がいい。
- 個々のレクチャーはそれぞれ大変良かったが、「源流をみてみたい」という気持ちからは欲求不満。
- ハイレベルな講演ばかりで非常に勉強になった。

4、総括と今後のカンファレンスへの課題

> 参加者について

今年度の参加者は 86 名（運営スタッフ込みで 89 名）で、昨年の 98 名よりも少なめであったが、北海道での病理学会総会から 6 週間後の開催という要因を考えれば、当初の予想を上回る参加人数であった。若手は頻回に学会参加しにくいという事情があつてか、アンケートに答えてくれた参加者のうち 20 代、30 代が昨年は 60%を超えていたが、今年度は 40%にとどまった。ただ、会期中のレクチャーに対する質問は若手からのものが目立っていた。女性参加者、病院からの参加者はともに全体の約 1/4 であった。

＞レクチャーについて

学会外から招待した演者はいずれも30代、40代の若手から中堅研究者で、その分野で世界をリードしている方にご講演いただいた。また学会員の講演にも腫瘍を毎日みている病理医ならではの視点を入れていただき、最新の未発表データも加えた魅力的な講演をいただいた。腫瘍の源流をみて「みたい」という欲求を持った時に、どのようなアプローチをして解決しているかという点をわかりやすく講演いただき、アンケート結果でも刺激を受けたという意見が多かった。20代の参加者からは、自分もこういった場で発表できるような研究をしていきたいというコメントもあり、和やかな雰囲気の中で勉強できたのではないと思う。

＞一般ポスター演題

20題であったが、内容的に症例報告から最先端の研究まで多岐にわたる内容の発表があった。本年は共催セミナーがあったためにショートポスタープレゼンテーションを行う時間がなかったが、特に意見はなかった。ただ、3グループに分けて討議を行ったが、グループごとに場所を分けてほしいという意見があった。たしかにポスターが近接して貼られている関係で、他のポスターの討議内容が聞こえてきて、討議に集中しにくい印象があった。会場の制約もあるために直ちに困難であろうが、今後の課題の一つであろう。

＞会場その他

昨年に引き続き、名鉄犬山ホテルで開催された。2年目ということもあり、ホテル側には極めてきめ細やかな対応をいただき、カンファレンスの進行もスムーズに行えた。夜遅くまで続くフリーディスカッションでも、昨年同様他の部屋とは離れた場所で行えて好評であった。酷暑であったために、熱中症対策でミネラルウォーターを多く準備し、講演会場の後方に並べ、余ったものは閉会時にお持ち帰りいただいた。フリーディスカッションのために準備したアルコール類も余ったために、同様にお持ち帰りいただくということもあったが、概ね順調に運営できたものとする。





5、謝辞

今回のカンファレンス開催にあたり、ご支援いただきました日本病理学会ならびに企業の皆様へ感謝申し上げます。準備に際しましては、日本病理学会研究推進委員会ならびに日本病理学会事務局から種々のアドバイスを賜りました。また、講演いただいた先生方には、多忙なスケジュールの中をご参加いただき貴重な議論や若手研究者へのアドバイスをいただき、心より御礼申し上げます。最後になりますが、本カンファレンスの準備、運営を手伝っていただいた大阪大学大学院医学系研究科病態病理学・病理診断科のスタッフの皆様へ深謝いたします。また多数の病理医が不在になる中、留守を守り診断業務を普段以上のペースで行っていただいた病理診断科スタッフの皆様へ深謝いたします。

